



新入会員に望むこと～班会議への参加～

東区支部 鈴木 真一郎

昨年4月に医政委員に任命されて約8ヶ月が経過したが、勉強不足のため未だ医療政策に関する持論を展開できる域まで達していない。

しかし、短期間ながらも医政活動を通して札幌市医師会が抱える問題点がいくつか見えてきたので、そのうちの一つに的を絞り、敢えて開業医の立場から私見を述べさせて頂くことをお許し願いたい。

私は、平成6年に無床診療所を開設し、開業と同時に札幌市医師会への入会を許可されたため、入会后10年が経過したことになる。

『在宅医療の充実』をメインテーマに診療活動を行ってきたため、医療機関との連携体制を確立するまでの期間、毎日の診療をこなしていくのが精一杯で、恥ずかしながら医師会活動に関心を寄せる余裕はほとんどなかった。そのため、支部役員の名を受けでも『面倒な仕事が増えて困る』としか受け止められなかったし、診療時間内に会合が設定される場合が多く、通常よりも早く診療を終了しなければならないことから、医師会活動そのものを敬遠しがちであった。加えて、開業当初、連携する医療機関の構想は所属している大学医局の関連施設で事足りると考えていたため、医師会の行事に参加するメリットは大してないものと判断していたが、それが大きな間違いであることに気づくまで一ヶ月もかからなかった。通院患者（特に高齢者の場合）の多くが、病気の検査や治療を勧めた際、必ずしも総合病院を希望するとは限らず、むしろ近隣の医療機関の情報を欲しがるとあることがわかったからである。

では、どうすればその情報を手に入れることができるのか。結論から言えば、一番簡単で確実な方法とは、ずばり『班会議に参加するこ

と』である。支部によって若干の違いはあるかもしれないが、年3～4回の頻度で班会議が開催されていると思われる。こまめに参加していけば、1年以内に近隣で開業しているかなりの数の医療機関の開業者や勤務医と面識を持てるはずである。そうすれば、先輩会員から患者の地域特性や医療情報が比較的容易に入手できるし、自院の診療活動を支える大きな力となるであろう。さらに、班会議では、支部役員会における連絡・協議事項や医師会の情報が班長から提供されており、医師会活動を知るための重要な拠点であると私は位置付けている。

ところで、私が開業した10年前と比較して、度重なる診療報酬改定により医療機関の収入は明らかに減少している。反対に、新規に開業する医療機関数は年々増加の一步を辿っている。そこで、医療機関は収入を増やすための数少ない手段の一つとして診療時間を延長せざるを得ない状況に追い込まれつつある。

一方、班会議や役員会を含めた各種委員会の開催時間は10年前と比べてあまり変わっておらず、入会して間もない医師がこういった会合に参加する上で、大きな障壁となっているという声を耳にする機会は少なくない。それでは、新入会員の中で班会議に積極的に参加し、自分が参加しやすい環境づくりを提言している会員はどの位いるのであろうか。

札幌市医師会の定款第4章第9条には『会員は、本会の目的に関する研究又は調査を本会に報告し、発表することができるとともに、本会の事業に関して意見を述べることができる。』と書かれてある。開業後1～2年は、自院の診療体制の確立に精一杯で、医師会活動に参加する余裕がないことは理解できるが、『多忙のた

めに参加する時間がない』とか『医師会活動に興味がない』という理由だけで班会議へ参加しないことは、医師会への提言を行う貴重な機会を失うばかりでなく、先程述べたような理由により、医業経営の面からみても大きなマイナスとなるであろう。

確かに、医師会の仕事はボランティア的要素が強い。日常診療や学会参加で疲れ切った身体に鞭打ってまで、医師会活動を行うことに疑問や抵抗を感じる会員が少なからず存在しているのも事実である。

しかし、我々医師にとって診療が最優先されることは当たり前であるものの、現執行部が大変な努力とボランティア精神で医師会運営に携わってなっているのを目の当たりにしたならば、一会員として医師会活動に参加する必要性が認識できるはずである。

もし、『すこやか健診が実施できる』など医師会事業の中で、自分に都合のよいところだけを選んで利用するような会員が増えていくようであれば、医師会は現状維持どころか衰退の一

途を辿るに違いない。

『たかが班会議に参加しないことで大騒ぎするな』と思われる方が多いかもしれないが、班会議への参加こそ医師会のシステムを理解していくための第一歩であり、『会員としての必要最低限の責務である』と私は考えている。一会員の意見が執行部まで届きにくいという声も聞かれるが、それこそ班会議を通してしつこいと言われる位、支部役員会へ要望書を提出したり医師会のホームページ・札幌通信への投稿を行ってみてはいかがだろうか。

以前から度々指摘されている、『班会議の活性化』を解決することが容易でないことや、開業医と勤務医の見解に温度差があることは誰しも認めるところであろう。しかし、先輩会員が苦勞して築き上げてこられた札幌市医師会をさらに発展させていくためにも、使い古された表現かもしれないが『ネバーギブアップ』の精神で医師会活動へ参加し、活躍されることを新入会員に期待していきたい。

(鈴木内科循環器クリニック)